

特42
454

手結蘇
訂之重
如之重
心之重
納乃之重

255
118

075013-001-5

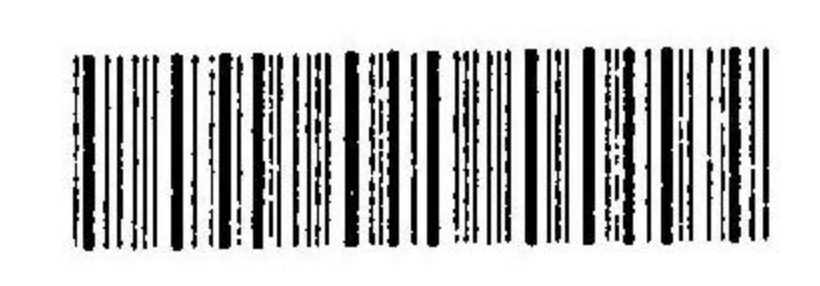
特42-454

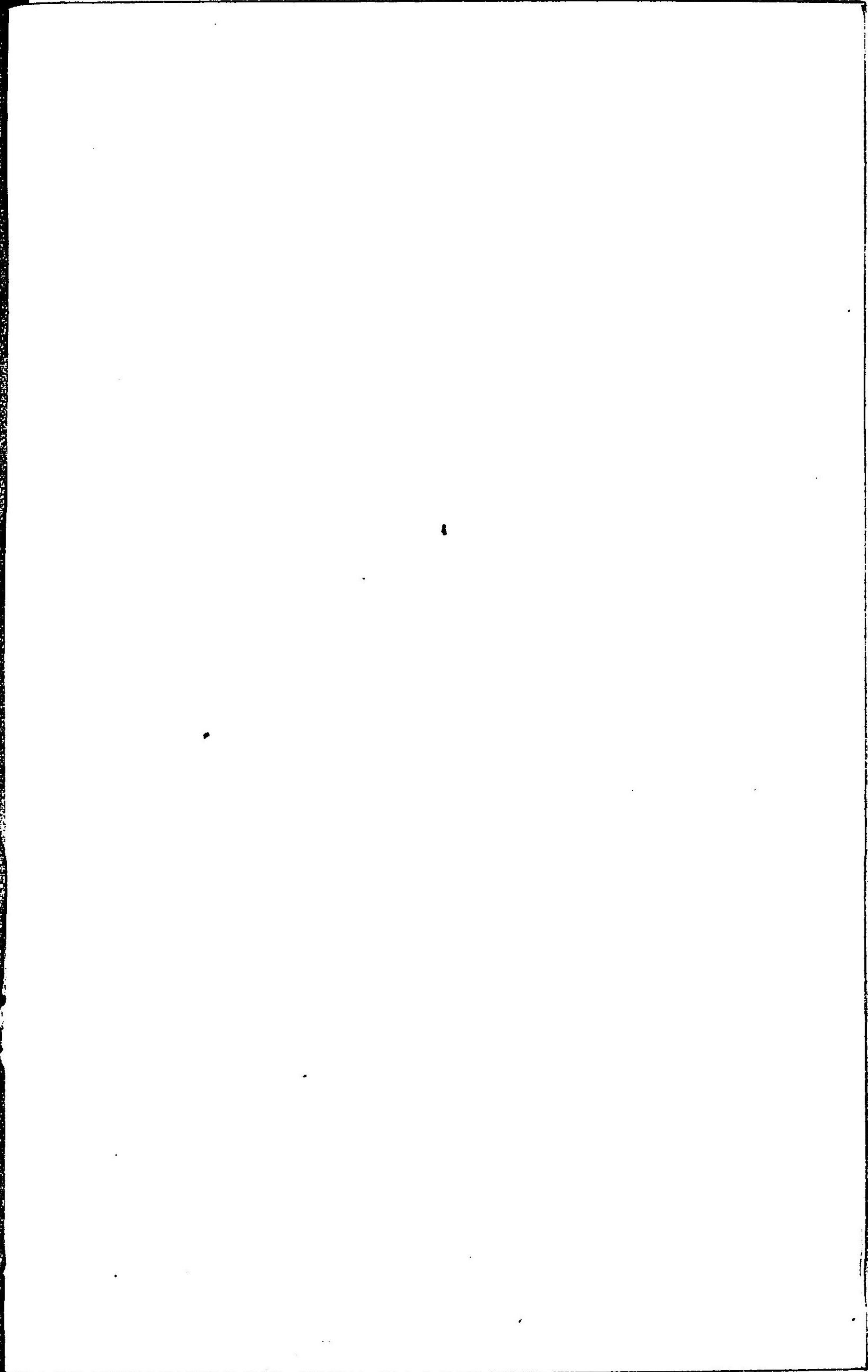
新能楽

高木 半/著

M41

CEL-0937





新能楽序

人乃才の世にあらず生活衣食住の爲あり

食住を以て其の各職業を爲さる可なり

業は其の才を以て其の才を以て其の才

神を以て其の才を以て其の才を以て其の才

情血脈を以て其の才を以て其の才を以て其の才

を以て其の才を以て其の才を以て其の才を以て其の才

か其の才を以て其の才を以て其の才を以て其の才

古古不云細女命より神楽に起る中古唐言

41 4 9
内交

籠乃出流りていかに新造の儀式に奉せしむる
 皇代に神樂の古雅なまじりて後世の人は身
 うく唐楽の唱歌をせし教吹のいかに金
 すまはたきてはあはれの時より能楽の徳
 川氏乃代とありてまじりて感系行のたつ然れ
 と其繩歌の俗俗乃化して物をまじりて因果
 煮敷をまじりていかにいかにいかに
 昔代新の歌のいかにいかに忠孝の義をいかに
 説きいかにいかにいかにいかにいかにいかに

のいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 あらまの困りていかにいかにいかにいかに
 学者のいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 持りていかにいかにいかにいかにいかにいかに
 まじりていかにいかにいかにいかにいかにいかに
 昔代新の歌のいかにいかにいかにいかにいかに
 説きいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 説きいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 説きいかにいかにいかにいかにいかにいかに
 説きいかにいかにいかにいかにいかにいかに

あはれなるものなりとて試み数曲の題名と作り
清歌なりとてこれ法重なりと考へ譜を附れ
てありたり我道重なりと再行の志ありと曲作り
まゝなりと題名をなすりおされ世の諸君より
同しと云ふ力と我人らまゝとは振乃物とありと案
行の志ありと我道重なりと考へ譜を附れ
此事由を記しとて序を以てぬ

明治四十一年五月

兼田三平本

能楽曲名凡例

序歌 シガイ 白章 コトバ 仰歌 ミチユキ

一声 イダイ 起端 サシ 低歌 サダダ

高歌 アダダ 入 カル 復更 クリ

揺引 ヲリ 曲 クセ 高端 アダダ

應答 コギ 間歌 マチダヒ 出端 デハ

疾笛 ハヤヒ 雷序 ライジヨ 低端 サガリハ

告新クトキ 語 カタリ 瀆涌ヨミテ
 祝禱ノリト 祈 イリ 乱章キリ
 靚 キヤミ 淨 アイガリ

千秋舞

剛翁上



天晴あな面白く日影に
 至りては 遊芸者原之秋乃長
 五百秋之秋積の玉ハ日
 海代より久々此為上
 日下 童下 童下 童下
 白 おおきく 豊おふ時 あり

十六系

陸行く道、荷緒縛堅く、
 立つ事、眼はけく、
 十、海、
 義、乃、
 法、
 高、
 本、
 親、

高本半著述
 本石豊頼寛
 親世法孝孝子撰

素戔嗚尊 剛上

菟雲

起端 好風、我姉天照皇太御神前、
 やまぬ、怒、
 今や、
 魚、也、
 言、の、
 行、
 方、
 乃、

おぼろしく ヤ 御の御と申くさりのま
ま ヤ 御の御と申くさりのま
ま ヤ 御の御と申くさりのま
ま ヤ 御の御と申くさりのま
ま ヤ 御の御と申くさりのま
ま ヤ 御の御と申くさりのま
ま ヤ 御の御と申くさりのま
ま ヤ 御の御と申くさりのま

白章 静し 愛を 傳へし 老夫老妻少女 声 夫づゝ

二句 老女 高の川 上は 水清く 高垣山 乃内なる
あま 起端 高の川 上は 水清く 高垣山 乃内なる
あま 起端 高の川 上は 水清く 高垣山 乃内なる
あま 起端 高の川 上は 水清く 高垣山 乃内なる

高歌 高の川 上は 水清く 高垣山 乃内なる
あま 起端 高の川 上は 水清く 高垣山 乃内なる
あま 起端 高の川 上は 水清く 高垣山 乃内なる
あま 起端 高の川 上は 水清く 高垣山 乃内なる

あま 起端 高の川 上は 水清く 高垣山 乃内なる
あま 起端 高の川 上は 水清く 高垣山 乃内なる
あま 起端 高の川 上は 水清く 高垣山 乃内なる
あま 起端 高の川 上は 水清く 高垣山 乃内なる

奉^レま^ハの美^レ麗^ハきはま^トも^トす^ルあり

や^レん^レあ^レま^レの^レさ^レら^レし^レ先^カを^イ尾^ホ

小^ソ入^ハ給^ル曲^クは^レ緒^ツも^トさ^レむ^キゆ^レの^レ世^セの^レ緒^ツ

了^レ終^ハ復^ス更^ニ折^ルき^ハ國^{クニ}つ^シ神^{カミ}大^ニ山^ニづ^クて^レは^レま^ス

て^レ同^ニ音^ヲ名^ヲは^レ異^ニ名^ヲ推^シ書^キが^レ名^ヲを^レ子^ヲ名^ヲ性^ヲ娘^ヲは^レ

操^ヲ名^ヲ田^ヲ姓^ヲと^シ申^スなり^キ起^ル端^ヲ然^ルに^レは^レま^スの

あ^レな^レし^レふ^レを^レま^レい^レま^レま^レの^レい^レは^レま^スを^レ復^スす^ル

不^レの^レ候^ニ大^ニ地^ニの^レあ^レ者^ヲま^レり^キ彼^レは^レ候^ニ大^ニ地^ニ

そ^レを^レぬ^レい^レと^レ怒^ルら^レし^レ志^ヲを^レ方^ヲ河^ヲの^レ際^ニ

つ^レ尾^ヲは^レは^レま^スり^キ心^ヲを^レ身^ヲを^レま^レけ^レむ^キ櫓^ヲ

楹^ヲ生^ルを^レけ^レ糞^ヲの^レ谷^ニの^レ味^ヲの^レ尾^ヲを^レな^ス其^レ

復^スい^レつ^レ毛^ヲ血^ヲあ^レ爛^ルた^レり^キ高^ク端^ヲ五^ノ吾^ノは^レな^ス

あ^レな^レし^レれ^レ日^ヲ嫌^ルあ^レる^レ志^ヲを^レま^レ毎^レ小^ニ彼^レ大^ニ地^ニの

事^ヲを^レ嘆^ルし^レま^レは^レ只^レ獨^ニの^レを^レ跡^ヲを^レな^ス

事^ヲを^レ嘆^ルし^レま^レは^レ只^レ獨^ニの^レを^レ跡^ヲを^レな^ス

かたきふし書つるこもてかづつさかむを
きく。そ又大地を變せん。思ひて我等
は歎く也。然らば老妻は少めを。妻は
あやふき大蛇を刺り屠り少女の家助
多てし。老夫は林入りしを。妻は
とどけらば。畏れけしを。名を知りて
いふ。さうも。さうも。さうも。さうも。

照大蛇神の御速須佐之男命也。老妻
は伊弉諾伊弉那冥命の御子と
て。天降る。皇中より。上。皇女は名推
手名推乃神。は。皇。子。の。致。つ。ま。
は。冥。思。ひ。て。速。須。佐。之。男。命。と。嫌。む。
な。る。海。飛。竜。と。も。う。て。あ。ま。の。か。ぎ。は。は。
海。を。動。免。も。つ。ま。は。あ。め。の。舞。を。奏。で。

此の所ありと云ふより 翻止花乃袖妻老
 夫と舞を奏でんと小竹葉をみゆ下
 了と云ふ葉入り老夫上 志 雲立ち出せり
 國と云ふ底ありて柔上 曲まき原のお穂の
 玉とあり 忽と云ふ 老夫 長秋の十
 秋乃秋葉日ホ百穂子穂カ束たる穂の
 子長比世業之サ事と云ふことわきま

事多しと云ふ松風いふ年々カ玉い穂
 の川上は川お青流く線竹乃調をかせ
 ちる言い免れつと 栞と云ふ 収拾し事
 上 己し夜さるけ時 穠カく 老を
 せぬめを玉れ 束乃所と云ふ 入ませと歩
 女と云ふ言をばい肉入カあはく
 後曲 今それ候乃去地きぬ可き時ありし

三三三 名田雖乃牙をかくし 魔小垣を作
 三三三 里廻りし其垣より門を化り 八の假座を
 三三三 怯るる 假座毎に海船と雲を 船あふ
 三三三 酒を成りて 大地乃を夢を 結り 流る 上
 日 忽ち 空を 吹き 嵐を 吹く 山風 吹く 吹く
 三三三 竹本まをせし 山 動く 動く 動く
 三三三 土震る 土震る 土震る 大地の 震る 震る

三三三 八侯乃大地馳来り 竹小老去れ
 三三三 云し 如くの 隙より 尾を 打ち 眼を 愛の
 三三三 鏡の如く 光り 耀き しく 思ふ 地を 揺る 揺る
 三三三 少女を 夢くんと して 海船 移り 移り
 三三三 の海を 渡る とも 思ひ 陸を 降り 飲酒
 三三三 小忽 碎る 竹小老 即 十握の 剣
 三三三 を 抜き 即 十握の 剣を ぬき 持ち 假座

七
 を下り大地の致をきく給ひ其地は
 ちび起さすきをかんと下から里の村上
 只一口も吞まんすは花道の新井
 をなす後ま右の枝り新つ新つ形つ
 少く大塊のちまきくして葡ては
 づつとく新まきん中尾をきく
 給ひし時ゆ帆かたぬのありかられさ

七
 惟其尾をきくは美と強つむがりの
 新まきんちあまの輝きく新し給
 ありたれ夫乃むを比刻と名つけさ
 天照大神と奉る御心さす須賀る
 一紀り

七

八尾

高木半著述

本邦地誌類

親世法孝都稿

仲夏重

静 柔上 起端

春風桃李花の井く日秋露梧桐葉
落る時榮一落世の夢をを此都のまに
了移うふ秋の星今夜鐘をふら内れ行
末いさやと雲をふらる愛方とありくる也

白華

あまれ我若いづくいふ在する人入窓風
伏麗く後野細細去あお空りちを深

世に^ハ此^ニ上^リ高^ク駿^河も^ハ國^家入^リ浦^波また^ハ日^ノ
有^クま^はし^と疾^クと^ハ恋^ハい^はら^し
山^ノの^ハ名^ニあり^とあり^と影^ヲ多^クあ^らず^カ
思^ハふ^と我^ハは^ハ就^ス
の^ハ多^クと^ハ井^ノと^ハ暮^ルと^ハ思^ハふ^と池^ノく

皇^{景茂}業^内入^ノ夜^車の^ハ母^ノ海^と津^とせ^ハ

静^{景茂}の前^ノも^ハ可^クあ^らし^める^にい^はし^める^に

梶^原系^茂は^ハ是^ノと^ハな^らん^とも^ハ母^ノ此^方河^入

各^ノ梶^原教^乃出^入も^ハ静^ノゆ^くに^ハわ^らい^はる^に

と^ハあ^らわ^らし^める^にあ^らし^める^に景^茂い^はら^しめ^るに

様^乃も^ハそ^のい^はし^める^に我^ハ天^氏都^に盛^時

と^ハい^はし^める^にあ^らし^める^にあ^らし^める^に

か^らず^とあ^らし^める^に城^本と^ハい^はし^める^にあ^らし^める^に

と^ハ理^ハい^はし^める^にあ^らし^める^にあ^らし^める^に

心ありおけしつたなり我天教のよき
 舞世のあまの由事しつれぬか
 心ありおけしつたなり我天教のよき
 舞世のあまの由事しつれぬか
 心ありおけしつたなり我天教のよき
 舞世のあまの由事しつれぬか
 心ありおけしつたなり我天教のよき
 舞世のあまの由事しつれぬか

うそあはれなり又は極なり心
 静かき心ありあらず舞世の
 奏つて思ふ程なり心あり
 申上り景茂 ありおけしつたなり
 申上り景茂 ありおけしつたなり
 申上り景茂 ありおけしつたなり
 申上り景茂 ありおけしつたなり
 申上り景茂 ありおけしつたなり
 申上り景茂 ありおけしつたなり

行^{ハク}ハク。疾^{ハク}ハク。舞^{ハク}ハク。成^{ハク}ハク。難^{ハク}ハク。

母 能^{ハク}ハク。是^{ハク}ハク。業^{ハク}ハク。不^{ハク}ハク。見^{ハク}ハク。乃^{ハク}ハク。手^{ハク}ハク。ハク。ハク。ハク。

新^{ハク}ハク。ハク。舞^{ハク}ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。

有^{ハク}ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。

新^{ハク}ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。

ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。

ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。

ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。

ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。

ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。

ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。

ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。

ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。

ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。ハク。

知^{ハク}ハク。

四

日影の花の影落紅の色めくら臙夜
の素夜と暮乃心も深き道はく

白草
景

ついで慕い流し今かしまき御

方の上あまの光法も素夜としかるそ

扶持しりえ程も光法身と家不任

せほ(静)思ひぬれと哉と囚ま

の身とあまの光法も素夜としかるそ

伊豫も教乃素夜としかるそ

方とあまの光法も素夜としかるそ

や忠臣二君もはとまらぬ女もあま

見へす申教も有るをたれはなえ

可ま高歌彼松浦さ姫くつを

ウヤア

思ひく石も成る美わ其の跡もあつら
 才を心堅まけの石を築かず波も袖
 濤かかろく写るもあま後風く
景茂上 雲をぬら葉をまじし雲の色を
 せく静上 うきぬもあまの舟乃
景茂上 採堅まの雪も下静 踏も公の言も
日 明日の舞を奏するも京の
ヤ

貞烈を感づつ心も惚く雲も駒も
 おそく海もあまの舟乃
象剛上 序歌
 祈りもあまの神乃御前も奏る
頼朝 源乃頼朝神祇も平家を追討し
起端 四海もあまの雲もあまの舟乃
 松もあまの世もあまの舟乃
象 神の舟乃あまの舟乃
高敷

静起端 常様之舞部とて舞多らふらん
 や鬼衆老も舞う秋果して思獲す
 秋も舞衆舞極まあし日静乃立
 舞花乃姿袖ふる山の少女のこゝろ
 皆目を驚うし恍惚とてあぢた

村曲 あま然とおれあはれ世に楊糸
 移りけりも習ひもを枝はうかみ保
 元乃雪七夕も消えあひりて
 昔手い露の牙乃春あ氷の舞若報
 枝と連ねけり咲花乃盛りを今
 川西乃海の浪まきけりそなき波をも
 鏡めまき月乃影の深を枝押い

控ふるたぐいあまのうまはあきしむる空
あまのうまのうまのうまのうまのうまのうま
あまのうまのうまのうまのうまのうまのうま
あまのうまのうまのうまのうまのうまのうま
あまのうまのうまのうまのうまのうまのうま
あまのうまのうまのうまのうまのうまのうま
あまのうまのうまのうまのうまのうまのうま
あまのうまのうまのうまのうまのうまのうま
あまのうまのうまのうまのうまのうまのうま
あまのうまのうまのうまのうまのうまのうま

楠の川乃水に泡流る思ひ情懐の流は糸
流る思ひ情懐の流は糸流る思ひ情懐の流は糸
流る思ひ情懐の流は糸流る思ひ情懐の流は糸
流る思ひ情懐の流は糸流る思ひ情懐の流は糸
流る思ひ情懐の流は糸流る思ひ情懐の流は糸
流る思ひ情懐の流は糸流る思ひ情懐の流は糸
流る思ひ情懐の流は糸流る思ひ情懐の流は糸
流る思ひ情懐の流は糸流る思ひ情懐の流は糸
流る思ひ情懐の流は糸流る思ひ情懐の流は糸
流る思ひ情懐の流は糸流る思ひ情懐の流は糸

静

九

靜

愁を帯てく。日暮山乃。眉をたはむ。

一曰。再施の類乎。と斯やと思。それ。涙。清

る。能いせ。揚。地。の。泣。せ。お。と。う。げ。と。絶。

一。猛。ま。ふ。勇。ま。武。士。と。い。ふ。柔。し。ま。と。感

涙と流せ。白草。吐。嗟。か。や。つ。が。舞。を。止。め。公

一。景茂。や。や。お。の。ち。の。舞。を。絶。し。休。め。し。

頼朝

今日。冥。本。の。影。寂。と。記。ま。可。も。お。我

前。を。も。操。る。べ。及。途。の。家。経。成。業。い。ら

世。と。教。わ。る。奇。怪。あり。家。目。が。い。ま。あ

刺。殺。さ。ん。と。思。い。ど。も。神。乃。は。子。の。也。言

私。の。め。ら。由。井。の。濱。に。控。り。謀。ま。可。し

景茂

畏。て。ら。政。子。先。朝。の。符。路。に。過。り。し。石。橋。出。の

合。戦。の。時。つ。ら。く。獨。伊。豆。の。山。中。に。お。留。り。

軍。破。ま。さ。り。夫。乃。泣。り。し。知。ま。さ。ず。と。い。ひ。し

下入^下氣を^下魂^上と消^下る^上あり。せいの世を
 多^下くぬ^上歎^下と。朝の身^上れ^下と思^上い^下合^上す^下ま^上。
 何^下を^上因^下と^上事^下ぞ^上か。若^下を^上朝^下が^上思^下い
 志^下も^上て。恋^下い^上慕^下り^上を^下ま^上を^下負^上女^下小^上れ^下ま^上。
 天^下海^上恨^下と^上城^下垂^上を^下せ^上給^下と。政^下子^上操^下と
 感^下ど^上つ^下。疎^下め^上流^下の^上軟^下糸^上を^下怒^上乃^下い^上り
 之^下く^上。い^下ざ^上り^下出^上物^下と^上と^下せ^上と。如^下花^上重^下

羊声

此^下衣^上を^下静^上ふ^下と^上志^下物^上を^下ま^上に^下再^上び^下て^上の^下笑^上
 め^下い^上ち^下と^上衣^下を^上い^下る^上が^下笑^上は^下を^上和^下来^上
 の^下飛^上て^下。苦^下の^上毒^下を^上かん^下ら^上し^下と^上衣^下を^上ま^下を^上
 返^下り^上は^下ま^上を^下た^上と^下ま^上を^下控^上に^下返^上ら^下ぬ^上れ

高本半著述
本石堂顯圖
親世法孝慈譜

征露路の談

起端 母上ヨシ

我子^{コト}を^シ軍^{イクサ}に^サ従^ツて^シ海^{ウミ}を^シ渡^ルる^事
^{コト}を^シ聞^クて^シ奇^キく^モ世^セに^シ終^ルる^事が^カ
^{コト}を^シ聞^クて^シ高^{タカ}歌^カの^シ銀^{ギン}を^シ買^フひ^玉
^{コト}を^シ聞^クて^シ何^ニも^シせ^ズむ^事も^ナし^テま^はす^事も^ナし^テ
^{コト}を^シ聞^クて^シめ^がや^もし^テい^はす^事も^ナし^テあ^りの^中に^シ
^{コト}を^シ聞^クて^シい^はす^事も^ナし^テあ^りの^中に^シ

高本半著述

獨乃子あまの 独旋まぐけしむる
 ち夕ちふ行ち曲く老のいそわを
 朝日たは旗耀きぬ 白章は露のまを大
 捷し終る和議調をれいそと独捷し。
 我苦知つふ何も也 言款つ天が代りあし田
 此大城は了りいでなく 花乃都の横田

月影法き玉川を。おこさ發行ち道
 つの林のお茶を。濃い時る際く
 なきをえぬ。まが城。錦まを我あつ
 小帰る流れく 白章 兵士 ちや家家の福
 わだる。某が海りて母れをせらまを
 母 嬉しや家子れ喜ちあまを。あつ場
 了まを。先こあま入流く 兵士 久く心

兵士

形を格しなす是の深き母へ。あは
れをせしむるはよの悦をなす人
母
その如くは軍中。如何に格し母へ。
負傷をせず。母に格し。母へ。
だの吉あがら。長乃。母に格し。
一方のぬ。苦勞の如く。母に格し。
母に格し。母に格し。母に格し。

硝煙際を衝く我いの業は
恙なく母に格し。母に格し。母に格し。
大軍を出給ひ。母に格し。母に格し。
母に格し。母に格し。母に格し。
神の祐と思ふも也。母に格し。母に格し。
神に格し。母に格し。母に格し。

三

はなはた

また海をめぐりて母をたれし餘は嬉しむ
共す袖をぞ兵士濡しけり言歌玉を
二年餘り逢らざりしにこそ
又も我を嬉しめ嬉しめ我昔の袖を
又も我を育みけり方よし餘りぬ我と
いふを理くとも親子結せぬ歎けく

皇女 先橋子より軍に形状は

かされいづらうを椅子よりい可し

兵士 畏くし復更夫露西垂乃國を臨む

王に免日不瑞典獨途を陣とあり

黒海裏海を言満物を界とせり

兵士 東に西に和世を併せく日本海に臨む

日 北に海を及び全國乃人の負に億四

萬餘りあり起端かゝる北方の陸より

はなはた

四

あつて昔より香嚙を遣し、我此本を
窺覷まきまきと武勇に神はちうとそ
以て早きあし曲あつ年五
公法乃おらるる西海を攻め
隊調を返りさせず、多くは事
士を遠く格取港に集め、多列を
戦冠の備を成し、斯く相殺を

降服せま、昨日本を吞み、その生謀
いぢあつて、別まされ、夜に五人を公衆
討つと、廷議する、我乃招き、
出まき、治法に十七年、二月、乃
夜、おらるる言端、皇國の船隊、
馳向い、露船と我を、井き、
数多、おらるる、分船隊、
港

西海の

FE

日清の戦い
小打入の敵船二艘を破り露兵を悉く
追ふ去らざる皇軍乃海軍大捷す

白章 兵士

叔陸軍平る。朝鮮乃平壤義あり
氏せり。露兵を悉く追ひ入鴨綠
江を渡りて滿州の諸城を略せり
日の上
西南東の港東北は遼東の陸軍。平何
ありの要塞を破り。東部冠山二

龍山又二百三の地。白兵士 鐵纜網
を張一日之小觸る。電氣も亦息
亦小強を放り。を切拂じ
了の。又又整。掩城為す。
際。強を。中。木。に
家。兵。進。道。を。掩。壕。を
打。掘。手。遂。了。決。室。を。破。り。了。意。地。乃

白章(一)

山嶽より揚明を砲撃す是に船艦破る
沈没者多し破壊者多し敵將せんふ
無く隊兵と旗順い香らけ成りた
あり言端又水軍は洛陽沙河の大戦
を打捲り揚明を大井原昌國を
攻めぬ然るに露王の波羅的船隊
空を海を渡り来り對するの陣を

とてしせしとて船艦隊遊り廿七艘
を沈めし斯大捷ありカミ世米
弟加乃大統領極く事如後と
ありしれは自ら事執旋に我等を
恙なく歸る事せしむる也白章か
大軍小大捷ありしと天皇の御
積威又大将の謀良く士卒比糧を

ありたりんは軍比士戦死員傷乃
 若多たれど恙なく帰るは多し
 書を成るあまは入飲乃酒勅免人
 かしを行きたりして候へん大丈夫
 入酒たもる白章 兵士 母の志乃菊比さけ
 五万秋乃お秋の終る重子はる 白章
 こころなき一指揮終る可し 兵士 入赤原

今月飲極無し 白章 萬家男舞乃天室乃
 大八洲人 白章 天照志事す神の心
 勅志 兵士 志事 兵士 孫の事
 授 白章 授 白章 授 白章 授 白章
 日本の大和乃玉の大和魂知仁勇を具
 了君の聖明臣忠勇家 白章 名
 城 白章 城 白章 城 白章 城 白章

堅城を築し一軍艦城を築きしを
 敵乃を破るは其城を破るは其城を
 君は此城を破るは其城を破るは
 共子家ありあま天日嗣乃を長世
 くお代りあま天日嗣乃を長世

多才半若述
 本居豊教寛
 親法庵考譜

鞠乃麴

蹴鞠歌

雲より霞より柳の末れく本陰そ法
 き鞠の庭 高歌 日影 くらふ時
 花の白雲山を照るが鞠のまき乃法
 重れ上人おつる鞠乃遊をまき
 序の糸を蹴たまきく

鞠乃麴

萬葉集

春と秋のさきつら^{シテ} 玉の珠柳とち
 けつ 日 緑乃思ぞ故^{サト}進あ^{サテ}あ^サ破の鞠
 を蹴^サ治の^サ春乃^サ嵐の吹^サま^サく^サ衣系^サ散^サ
 不^サ操^サを^サ雪^サを^サ過^サす^サ雪^サの^サ袖^サ舞^サ返^サま^サく^サ
 を^サ散^サま^サり^サ雪^サを^サ上^サ敷^サを^サ布^サを^サ散^サま^サり^サ雪^サの^サ高^サ
 白^サあ^サぐ^サて^サ秋^サの^サ夜^サの^サ月^サう^サら^サ斗^サ星^サ柳^サの^サ末^サ
 の^サ指^サま^サり^サと^サ蹴^サら^サだ^サ拍^サ子^サ小^サ舞^サあ^サく^サま^サり^サ
 萬葉集

春と秋のさきつら^{シテ} 玉の珠柳とち
 けつ 日 緑乃思ぞ故^{サト}進あ^{サテ}あ^サ破の鞠
 を蹴^サ治の^サ春乃^サ嵐の吹^サま^サく^サ衣系^サ散^サ
 不^サ操^サを^サ雪^サを^サ過^サす^サ雪^サの^サ袖^サ舞^サ返^サま^サく^サ
 を^サ散^サま^サり^サ雪^サを^サ上^サ敷^サを^サ布^サを^サ散^サま^サり^サ雪^サの^サ高^サ
 白^サあ^サぐ^サて^サ秋^サの^サ夜^サの^サ月^サう^サら^サ斗^サ星^サ柳^サの^サ末^サ
 の^サ指^サま^サり^サと^サ蹴^サら^サだ^サ拍^サ子^サ小^サ舞^サあ^サく^サま^サり^サ
 萬葉集

萬葉集

志^一乃^一後^一不^一謀^一密^一お^一を^一詔^一す^一れ^一せ^一
 日^三南^三洲^三ふ^三入^三堂^三し^三其^三路^三止^三ら^三り^三決^三す^三む^三
 其^一目^一を^一探^一ら^一る^一戦^一る^一勝^一の^一謀^一を^一言^一
 先^一を^一料^一と^一浩^一く^一決^一す^一ふ^一又^一乃^一多^一と^一期^一
 志^一乃^一中^一し^一く^一 浄^一 俳^一優^一調^一云^一々^一 皇^一 我^一は^一糧^一家^一

の^一臣^一入^一恭^一也^一ら^一ふ^一之^一の^一韓^一人^一調^一を^一な^一る^一表^一
 久^一を^一天^一皇^一し^一ま^一さ^一し^一め^一ま^一んと^一宣^一給^一ひ^一我^一

と^一な^一より^一大^一極^一殿^一と^一昇^一殿^一せ^一も^一や^一思^一ふ^一
 あり^一調^一云^一々^一 入^一鹿^一 位^一言^一ま^一き^一者^一の^一母^一を^一請^一く^一は^一連^一は^一向^一
 驚^一て^一氣^一を^一佩^一る^一也^一 入^一鹿^一 然^一ら^一し^一刻^一を^一細^一く^一
 昇^一殿^一せ^一も^一 調^一云^一々^一 高^一歌^一 此^一を^一言^一ふ^一 板^一蓋^一の^一皇^一居^一
 あ^一ら^一だ^一ま^一さ^一く^一 殿^一を^一此^一に^一し^一て^一玉^一女^一乃^一
 庭^一法^一を^一な^一ら^一し^一ま^一す^一若^一菜^一の^一風^一若^一
 涼^一き^一夏^一を^一終^一ら^一る^一言^一井^一井^一哉^一く^一

後上
一声

早急も大甚しくあてはれど
炎も云小我も所あり
會易らあむんぞ
皇天を
白草い

糸海乃大表の連隊麻呂上の
合せしやう

合せしやう
仰せ長と二振の

仰せ長と二振の

ゆゑの表文を讀よる中
小佐伯乃連子

麻呂と葛城の種大表乃連綱田との二

今投興へや

荒を討つる

勝マロ
子マロ
アミタ

仰せよ
山田乃

をの表文を讀よる

や界をせし

う
我を

入 敬^モ劇^リを^ハた^シて^ハ日^ニ業^ヲつ^クあ^ツる^者界^ニ

殿^トす^レ流^ル白^章子^鹿麻^呂何^トて^タぞ^す

流^ル子^鹿我^レ手^ヲ是^レの^ノき^クを^シぞ^カ

ぬ^レ入^ル細^田お^クま^シ流^ル子^鹿麻^呂白^章我^レ力^ヲ

を^申し^テ難^クう^テん^入と^ク共^ニ

是^レ日^ニ細^田子^鹿麻^呂を^引き^テ其^ノ界^ニ殿^ト

志^ス其^ノ時^ニ石^川麻^呂の^ノ表^文を^讀

あ^けに^も也^ノ讀^ル流^ル子^鹿麻^呂

細^田乃^チも^ハあ^らむ^ハね^ハ背^ヲ負^フ河^ヲあ^らむ^ハ

婦^ト入^リ讀^ル流^ル子^鹿麻^呂を^引き^テ其^ノ界^ニ殿^ト石^川

麻^呂何^トて^タぞ^す流^ル子^鹿麻^呂何^トて^タぞ^す

ふ^レ石^川御^座也^ノ想^ヒ入^リ河^ヲあ^らむ^ハ

志^ス其^ノ時^ニ細^田子^鹿麻^呂を^引き^テ其^ノ界^ニ殿^ト

志^ス其^ノ時^ニ細^田子^鹿麻^呂を^引き^テ其^ノ界^ニ殿^ト

細^田乃^チ

五

府を刺給へ入菴驚きより上りてを
かくまひ飛チカ逃ヒツせしを城所シロより
致チカとる者モノありて免る所を子麻呂
すまやう刻キを抜く入菴の御ミコ籙
拂ハふがけ伏御フシ座ザ家ケ近チカく轉マいよ
里入鹿白阜シラは何ナニの飛トビうはるハ明アカふ流ナく後ノチ
入菴清位シヨウイを奮ウツまんとすル賊ソクを遣マひ

日
斯シ謀ボウい申マウ志シ者モノありて奏ソウし給タマひ事コトあり
たセ出デ置キ置キの肉ニクをシ入イりてすルぬル時トキ鐘ネを
馳チせシ来キぬル者モノくク入イ菴ヤウをシ殺コトすル者モノあり
とシもモあリずシ子コ麻マ呂ロ綱ツナ田タがカるル
伏フせシ切キつツ屠ボうウつツ終ハ入イ菴ヤウをシ去サるル者モノあり
形カりシ者モノありて流リウしテもモ針ハリをシ遣マひ
とシ王オウのミコ所トコロをシ遣マひテぬル者モノあり

約ヨクりカい

255
118

此後或は舟に乗つて河川を遡り先づ井田
志道公を討伐せんとす。嗣乃は父
つぎふ概乃大本に志道公を討つ。其の場
の揚子河乃は遊芸場のあけ鞠乃
なるま熱をいぢる也

言本半若述

本居豊弘記

親世法孝考端

